

クロード・モネ作『印象・日の出』の鑑賞における、 美的特性の感受と主題感受の調査研究（中学1年生の場合）

*立 原 慶 一

A study of sensitivity to the aesthetic properties and motifs of Claude Monet's *Impression, soleil levant* (first year junior high school students)

TACHIHARA Yoshikazu

Abstract

With this thematic material, it is expected that pupils will sense numerous aesthetic properties from the characteristic features of the mode of expression, and use them as a guide to divining the painting's motif. A technique of analyzing the rich and diverse aesthetic properties of the painting allows aspects of art-appreciation ability to be structuralized. Assuming this to be the case, it then becomes possible to develop a logic for effective teaching. In this study involving thematic practice, as a conduit to the ultimate goal of sensitivity to motifs, pupils acquired an awareness of the importance of aesthetic properties identified from features of the expressive approach. As a special quality of this thematic material, aesthetic properties were structuralized through combination, and of 154 pupils, 100 (64.9%) were made aware of contrasting aesthetic properties. The realization that this would make sensate grasp of the motif more certain than simple sensitivity to the aesthetic properties means that this theory can be utilized in future instruction.

Key words : aesthetic property (美的特性)
sensitivity to the subject (主題の感受)
characteristic features of the mode of expression (表現方法の特徴)
art-appreciation ability (鑑賞能力)
contrasting aesthetic property (対比の美意識)

はじめに

学習指導要領美術編はB鑑賞(1)のAで美術史・芸術学ではなく、美術教育に独自の立場から鑑賞能力として美的特性（「よさや美しさ」の語句を用いている）¹、並びに主題の感受を提起している。それらを切り口とすることで、中学生における鑑賞能力の実態を探究することができよう。それを受けて本稿は研究方法の端緒として、一体何を研究の対象とするべきなのか。それは授業中に生徒によって記載された、ワークシート

の内容と考える。

本研究のために題材「モネ作『印象・日の出』(1873年、48×63cm、マルモッタン美術館)の鑑賞」の実践を宮城教育大学附属中学校1年生4クラス154名に対して行い、ワークシートを作成させるという形で授業を進めていく。そこには「第一印象は何か」「表現方法の特徴と、それから何が感じ取れるか」「作品の主題として感じ取れるものは何か」の3項目が課題とされている。回答内容は、鑑賞能力を類型化し数値化するための客観的なデータとして、学術的に処理されることに

* 宮城教育大学美術教育講座

なる。

しかしこの手法が成果をもたらさない題材も、一部にあることに触れておきたい。たとえばヨハネス・フェルメール作『牛乳を注ぐ女』(1658年、45.5×41cm、アムステルダム国立美術館)の鑑賞では表現方法の局面に立ち会っても、それから美的特性はほとんど感受されない。例として描写・彩色法から得た特徴として「落ち着いた色」、構図法に着目して把握した「左側にものが偏っている」の言葉も、生徒によってごくわずかしか発せられない。さらには絵を見た第一印象もまた最終的に感受されるべき主題も、質的にあまり代わり映えがしない。鑑賞体験における内実と発展性の希薄さが、生徒の主題感受行為を滞らせてしまうのである。

通常、鑑賞体験を時間経過とともに深めさせることで、生徒は授業のねらいである主題感受に到達できるものである。そうした教育的な道順がここでは描けないのである。言い換えれば、教師側の指導が彼らに浸透しその鑑賞能力が高められるという筋道は、遺憾ながら想定されえないのである。

しかし本題材で生徒は表現方法の特徴から数多くの美的特性を感受し、それを導き手として絵の主題を感受することが期待される。ここで多様で豊穡な美的特性が提起されたが、それは分析の対象となる。そうした手法によって鑑賞能力の様相を構造化できる。それを念頭に置いて、今後における有効な指導のあり方を理論化することが、可能になるものと思われる。これからの論述の中で、本題材は実りある鑑賞教育研究のための素材として適格性の高いことが、判明しよう。

1. 本題材における美的特性

(1) 表現方法の特徴から感受した美的特性

生徒が本題材で表現方法の特徴から感受した、美的特性の種類として以下の例がある。

・「形態特性」—「濃い」「淡い」などの形態特性が構造

化されることでもたらされた、「濃淡の対比という美的秩序をめぐる美意識」

・「形態特性」—色遣いなどの形態特性が構造化されることでもたらされた、「色彩の対比という美的秩序をめぐる美意識」

・その他の「形態特性」—「ごちゃごちゃした」「はっきりしない」「グラデーションみたい」「(単独で)ほやっとした」「(単独で)ほかしたような」「(単独で)ほんやりした」「(単独で)濃い」「(単独で)薄い」「かくかくしてない(タッチ)」「バラバラな(タッチ)」

・「自然特性」—「流れるような」「(タッチや線などが)水っぽくない」「べたっとした」「かさかさした」

・「行為特性」—「大まかな」「大ざっぱな」「ザザー(と塗った感じ)」「ていねい」「ちょんちょんのタッチ」「こすったような(線)」「柔らかな」「かすれさせたような」「拭き取ったような」「カサカサと描いたような線」「シャシャ(と軽く塗った感じ)」

・「趣味特性」—「じんわりとした」

※「感情特性」と「反応特性」は皆無。

(2) 主題として感受された美的特性

生徒が絵の主題として感受した美的特性の種類として以下の例がある。

・「趣味特性」(46名)—「日の出の美しさ」「日の出のきれいな」「日の出のすばらしさ」「日の出のみごとさ」「一日の始まりの美しさ」

・「感情特性」(38名)—「一日の始まりをプラス(ゲレン・ヘルメレンの事例「喜びに満ちた」から推察して感情特性と見なした)のイメージで表す」「海から太陽が出るように暗闇でも希望はある(「喜びに満ちた」から推察して感情特性に位置づけた)」「太陽は希望」「朝のさわやかさ」「孤独さ」「淋しさ」

・「自然特性」(24名)—「太陽の明るさ」「明るい朝日」「公害によって汚染された海(事例「荒れ果てた」から推察して自然特性)」「朝日のあたたかさ」「太陽の輝き」

1 松崎俊之「美的特性に関する階層構造理論」、『芸術文化第15号』(東北芸術文化学会誌)2010年、p.12

(1)感情特性。暗い、厳粛な、清澄な、感傷的な、喜びに満ちた、悲しい、憂鬱な、陽気な、気の滅入る、快活な、心がかき乱された、仰々しい、奔放な。(2)行為特性。大胆な、神経質な、張り詰めた、元気な、激しい、強烈な、精神的な、澆漓とした、型苦しい、尊大な、情熱的な、くつろいだ。(3)形態特性。まとまった、首尾一貫した、しっかりと結びついた、完全な、均衡の採れた、混沌とした。(4)趣味特性。エレガントな、どぎつい、けばけばしい、崇高な、美しい、無様な、見栄えのする、陳腐な、キツク、卑俗な。(5)反応・興発的特性。愉快な、衝撃的な、不可解な、印象的な、引きつけられる、退屈な、滑稽な、うんざりする、驚くべき、楽しい、むかつく、興味深い、目がくらむ。(6)自然特性。寒い、暖かい、冷たい、輝かしい、ゴツゴツした、柔らかい、柔和な、なめらかな。ただしこの分類で取り上げられている美的特性の間には、明確な境界線があるわけではないとされる。

「朝の静けさ（事例「穏やかな」から推察して自然特性）」

・「反応特性」(4名) — 「心に映る（「引きつけられた」と同義と見なした）風景」「パッと印象を与えるような（印象的な）」

・「行為特性」(4名) — 「平和な（事例「暴力的な」から推測して行為特性）風景」

絵の主題として感受された美的特性の項目を件数の多い順から並べると、「趣味特性」(46)「感情特性」(38)「自然特性」(24)「反応特性」(4)「行為特性」(4)となる。「形態特性」は表現方法の特徴に着目する際に実に多く感受されたが、主題感受の場面では皆無であった。

「趣味特性」は本題材における絵の主題として、46件も感受され最大数を示した。絵の主題とは全体的な美的特性の謂いでもあるが、それは「美しい」「きれい」「みごとな」などの形容詞によって数多く感受された。しかし表現方法としての描写・彩色法の特徴から、当の趣味特性はわずか1例（「じんわりとした」）しか感受されなかった。

また「感情特性」と「反応特性」に関しては主題として感受されたが、表現方法をめぐっては皆無であった。生徒が表現方法の特徴に着目しても「プラス価値的感情（喜びに満ちたなど）」「希望はある」などの感情特性、「印象的」「心に映る（引きつけられるような）」などの反応特性は一切感受されなかった。それらは描写や彩色など表現方法の部分ではなく、絵全体から直観的に把握されるべき類のものなのである。本題材にあって両美的特性は、絵の部分に着目することによ

ては感受されないのである。

「自然特性」と「行為特性」は一方で絵の主題であるとともに、他方で表現方法の特徴から感受された美的特性としても、また存在している点でユニークである。だが、同一生徒にあって絵の主題として感受された美的特性の種類と、表現方法の特徴から感受した美的特性のそれとの間に、総じて相関関係は認められなかった。

また主題として把握された非美的特性である、「名詞句」では以下の例がある。

「日の出」

「朝日」

「港の様子」

「一日のはじまり」

「日の出のときのまわりの風景」

これら名詞句による知的な把握にあっては、鑑賞能力が発揮されていない。感性が働かされていないからであり、まさに主題感受に届かなかった事例といえよう。感性とは意味や心情を直観的に把握できる能力である。それらは主述関係を内在させるワン・センテンスとして存在し、論弁性を本質とする。それを知的に理解するには、一定の時間経過が必要とされるのに対して、感性によれば瞬時に把握できるのである。それはとにかく非美的特性としての名詞句によって把握がなされる状況は鑑賞能力の不足や、欠落を見極めるためのメルクマールとなりうる。

2. 第一印象の類型化と主題感受の様相

(1) 第一印象で得た全体的な美的特性の例（154名中44人で28.6%）

「海に反射する日の出がきれい」

「きれいな日の出が見える、空気がきれい」

「朝日が海に写されてきれい」

「何となく淋しい感じ」

「一日が始まるときのすがすがしさ」

「日の光が水面に反射して神秘的な感じ」

「全体的にふわっとした感じ」

「切ない感じ」

「朝のぼやっとした感じ」

「静かな感じでよいなと思った」

「朝のおだやかな感じ」



モネ「印象・日の出」マルモッタン美術館1873年
48×41cm

「気分が落ち着く感じ」

(2) 第一印象で得た部分的な美的特性の例 (154名中64人で41.5%)

「タッチの向きがバラバラ」

「色づかいが少し変てこ」

「色づかいがきれい」

「色が落ち着いている」

「色づかいにアタタカみがある」

「はっきり描いていないのでじんわりした感じ」

「パット見てシンプルな絵だけど、濃い色から薄い色まで使われていて、色だけでアピールしている感じ」

「大ざっぱな感じ」

「絵が雑だと思った」

「グラデーションが色あざやか」

「太陽が海面に写ったところがあざやか」

(3) 第一印象で美的特性を感受できなかった (非美的特性の把握) 例 (154名中46人で29.9%)

「出てきたばかりの太陽が水面にオレンジ色に映っている」

「海に映っている光の色が一色ではない」

「最初は夕焼けに見えた」

「海と空が一緒になっている」

「海と空の境が見えない」

「海の奥のほうにいくにつれて暗くなっている」

「近くから見るより、遠くから見るほうが分かる」

次に以上の全3類型と、主題感受の様相の関係を探ってみよう。

(1) 第1類型「第一印象で全体的な美的特性を感受した類型」(154名中44人で28.6%)

| 絵の主題感受者 | 不感受者 | 無回答 |
|------------|------|-----|
| 43 (97.8%) | 0 | 1 |

(2) 第2類型「第一印象で部分的な美的特性を感受した類型」(154名中64人で41.5%)

| 絵の主題感受者 | 不感受者 | 無回答 |
|------------|------|-----|
| 46 (71.9%) | 14 | 4 |

(3) 第3類型「第一印象で美的特性を感受できなかった類型」(154名中46人で29.9%)

| 絵の主題感受者 | 不感受者 | 無回答 |
|------------|------|-----|
| 25 (54.3%) | 13 | 8 |

絵から美的特性を豊かに感受することは鑑賞能力の働きによるものだが、その理を明示するかのようになり、最高位にある第1類型で97.8%、続く第2類型で71.9%、最下位の第3類型で54.3%とランクが劣位になるにしたがって、最終的に行われるべき主題感受の達成比率は低下している。

生徒に「絵の第一印象は何か?」という負荷の弱い問いかけが、こだわりのない自由な回答を数多く導いたものと思われる。そうした中であっても第1類型においては、第一印象の段階で早くも絵の全体的な美的特性を把握している、生徒の存在が注目される。ここでは1名の無回答者という例外を除いて、全員が絵の主題を感受できている。この類型では感性の働きが当初から、自覚的になされていることが分かる。

第2類型は部分的な美的特性を捉えている点に特徴があるが、そこに属する生徒の71.9%が最終的に主題を感受できている。第3類型は第一印象で、美的特性を直観的に把握できない点をメルクマールとするが、そこに属する者でさえも54.3%に届いている。この調査項目は、鑑賞行為において美的特性を表現方法の特徴から部分的ではなく、常に全体を見渡す視点を導入するなどダイナミックに感受すればするほど、最終的に主題を感受できる比率が高まる事情を示している。

3. 対比の美的秩序を含む美的特性感受の類型化と主題感受の様相

フェルメール作品などの例外はあるものの、一般に絵の表現方法の特徴から生徒によって美的特性が豊かに感受されるものだが、本題材ではそれが組み合わせられることで構造化され、対比という美的秩序に関する美意識が形づくられる点に特徴がある。対比とは調和や均衡、リズム、比例などと同じ美的秩序として扱われる。本章では美的特性の複合体としての「対比という美的秩序をめぐる美意識」が、生徒を主題感受へと導く働き大きさに着目してみたい。既に見たように、鑑賞能力とは美的特性及び主題をより豊かに感受できたか、否かの能力である。以下の類型化及び数値化では(1)の類型を最上位として、(11)の類型を最下位として能力が序列化されている。

(1) 表現方法の特徴から濃淡対比と色彩対比の美的秩序を含む、5件(種類の幅広さは問わない)。

| | |
|--|---|
| 以下同じ)の美的特性を感受した類型 (154名中4人、2.6%) | <把握された主題の非美的特性> 名詞句 2 14.3% |
| <感受された主題の美的特性> 感情特性 2 反応特性 2 (主題感受者 4 100%) | (6) 表現方法の特徴から3件の美的特性を感受した 類型 (154名中6人、3.9%) <感受された主題の美的特性> 感情特性 2 自然特性 2 (主題感受者 4 66.7%) |
| (2) 表現方法の特徴から濃淡対比と色彩対比の美的 秩序を含む、4件の美的特性を感受した類型 (154名中12人、7.8%) | <把握された主題の非美的特性> 名詞句 2 33.3% |
| <感受された主題の美的特性> 趣味特性 8 感情特性 4 (主題感受者 12 100%) | (7) 表現方法の特徴からいずれかの対比の美的秩序 を含む、2件の美的特性を感受した類型 (154名中8人、5.2%) <感受された主題の美的特性> 趣味特性 8 (主題感受者 8 100%) |
| (3) 表現方法の特徴からいずれかの対比の美的秩序 を含む、4件の美的特性を感受した類型 (154名中6人、3.9%) | <把握された主題の非美的特性> 名詞句 0 0.0% |
| <感受された主題の美的特性> 感情特性 6 (主題感受者 6 100%) | (8) 表現方法の特徴から2件の美的特性を感受した 類型 (154名中6人、3.9%) <感受された主題の美的特性> 自然特性 4 (主題感受者 4 66.7%) |
| (4) 表現方法の特徴から濃淡対比と色彩対比の美的 秩序を含む、3件の美的特性を感受した類型 (154名中38人、24.7%) | <把握された主題の非美的特性> 名詞句 2 33.3% |
| <感受された主題の美的特性> 感情特性 20 趣味特性 10 反応特性 2 自然特性 2 (主題感受者 34 89.5%) | (9) 表現方法の特徴からいずれかの対比の美的秩序 を含む、1件の美的特性を感受した類型 (154名中18人、11.7%) <感受された主題の美的特性> 趣味特性 6 自然特性 4 行為特性 4 感情特性 2 (主題感受者 16 88.9%) |
| <把握された主題の非美的特性> 名詞句 4 10.5% | <把握された主題の非美的特性> 名詞句 2 11.1% |
| (5) 表現方法の特徴からいずれかの対比の美的秩序 を含む、3件の美的特性を感受した類型 (154名中14人、9.0%) | |
| <感受された主題の美的特性> 趣味特性 8 感情特性 2 自然特性 2 (主題感受者 12 85.7%) | |

- (10) 表現方法の特徴から1件の美的特性を感受した
類型 (154名中22人、14.3%)

＜感受された主題の美的特性＞

自然特性 8

趣味特性 4

(主題感受者 12 54.5%)

＜把握された主題の非美的特性＞

名詞句 6 33.3%

※ (無回答) 4

- (11) 表現方法の特徴から美的特性を一切感受しな
かった類型 (154名中20人、13%)

＜感受された主題の美的特性＞

自然特性 2

趣味特性 2

(主題感受者 4 20%)

＜把握された主題の非美的特性＞

名詞句 8 66.6%

※ (無回答) 8

この類型化および数値化では、表現方法の特徴をめぐり美的特性の感受件数と主題に関する名詞句把握の実状との関係、対比という美的秩序に関する美意識をより多く感受した場合と、その少ない場合が主題感受に及ぼす関係が示されている。そこから判明するのは、以下のことである。

第一に、4件以上の美的特性を感受した類型にあって、絵の主題として不覚にも名詞句として把握しただけの生徒は皆無であった。彼らにあっては、主題を名詞句として知的に理解するのではなく、ワン・センテンス(命題)であるための条件としての主述関係を内在させた形容詞句もしくは、判然たるワン・センテンスとして直観的に把握する傾向が強いのである。まさに真正の鑑賞体験がなされ、その能力が余すところなく発揮されたことになる。

第二に、同件の美的特性を直観的に把握できた類型の場合であっても、対比という美的秩序に関する美意識を多く含んだ形で感受した生徒の方が、主題の感受行為をより確実に行うことができた。たとえば(4)(5)(6)の類型を見てみよう。それら3類型はいずれも全3件の美的特性を感受している点で共通する。しかし各類型における名詞句把握の実状に着目してみると、(4)は

10.5%、(5)は14.3%、(6)は33.3%と数値が徐々に高まっている。

名詞句で主題を捉えた生徒は鑑賞体験の不成功者と見なされるので、(4)は(5)よりも、また(5)は(6)よりも鑑賞能力のレベルが高いことになる。この事情は2件並びに1件の美的特性を感受した類型の場合についても、同様に当てはまるのである。こうした事実が注目される。

4. 美的特性感受の類型化と主題感受の様相

前章では、対比の美的秩序をめぐる美意識が主題感受の行為にもたらす影響の度合いを探るべく、その有無と数量を念頭に置いて美的特性感受の類型化を行った。結果的に類型は全11個の多さに及んでしまった。それに対して本章では議論を簡潔にするべく、美的特性感受の件数が同一の場合を一括りとする。結果的に6つの類型に序列化される。

- (1) 第1類型「表現方法の特徴から5件の美的特性を感受した類型」 (全154名中4人) 2.6%

＜感受された主題の美的特性＞

感情特性 2

反応特性 2

(主題感受者 4 100%)

- (2) 第2類型「表現方法の特徴から4件の美的特性を感受した類型」 (全154名中18人) 11.7%

＜感受された主題の美的特性＞

感情特性 10

趣味特性 8

(主題感受者 18 100%)

- (3) 第3類型「表現方法の特徴から3件の美的特性を感受した類型」 (全154名中58人) 37.6%

＜感受された主題の美的特性＞

感情特性 24

趣味特性 18

自然特性 6

反応特性 2

(主題感受者 50 86.2%)

＜把握された主題の非美的特性＞

名詞句 8 13.8%

(4) 第4類型「表現方法の特徴から2件の美的特性を感受した類型」（全154名中14人）9.1%

＜感受された主題の美的特性＞

趣味特性 8

自然特性 4

（主題感受者 12 85.7%）

＜把握された主題の非美的特性＞

名詞句 2 14.3%

(5) 第5類型「表現方法の特徴から1件の美的特性を感受した類型」（全154名中40人）26%

＜感受された主題の美的特性＞

自然特性 12

趣味特性 10

行為特性 4

感情特性 2

（主題感受者 28 70%）

＜把握された主題の非美的特性＞

名詞句 8 22.2%

※（無回答） 4 10%

(6) 第6類型「表現方法の特徴から美的特性を感受しなかった類型」（全154名中20人）13%

＜感受された主題の美的特性＞

趣味特性 2

自然特性 2

（主題感受者 4 20%）

＜把握された主題の非美的特性＞

名詞句 8 66.6%

※（無回答） 8 40%

上記の類型化及び数値化では、類型ごとに美的特性感受の件数と主題の感受成就の関係、並びに各類型にはどのような美的特性を趣旨とする主題が、それぞれのくらい分布しているのかが示されている。次に調査の結果を考察してみよう。

表現方法の特徴に着目して多くの美的特性を感受した生徒ほど、絵の主題を捉えている比率が高い。美的特性をどれくらい多く感受したのか、すなわち表現方法をめぐる美的体験の件数が、主題感受へと導くパイプの役目を果たしているのである。主題を名詞句として知的にしか把握できない生徒や、無回答の者が全体

に占める割合を類型ごとに見れば、その理は即座に判明する。主題感受に至らなかった生徒は、表現方法の特徴を見つめてそれから美的特性を感受する場面も少ないのである。この両者には比例関係が成立していることが分かる。

趣味特性的主題の感受は46件の最大数を示しただけあって、平均となる成績中位の第4類型で最大数及び最高比率を示すとともに、各類型にわたって一定数がまんべんなく存在している。成績上位の類型（第1～第3類型）にあっては感情特性的主題が多く把握され、成績下位（第5～第6類型）の類型においては自然特性的主題の感受が顕著である。前者で鑑賞体験は、高い感性能力の裏付けを得ることで人間観や現実観に強く浸透されたが、後者では能力的制約のためそれもままならなかったことが、そうした傾向を導く理由になっているものと思われる。

反応特性及び行為特性的主題はごく少数ながら、各類型に気まぐれな頻度で散在している。無回答は鑑賞能力的に見て劣位にある第5類型と第6類型に現れ、とくに後者ではなんと前者の4倍に相当する4割にも及ぶ、という低調さを露呈した。ここにも鑑賞能力の実態がはっきりと反映される結果となる。

まとめ

今回の題材実践研究では、最終的なねらいである主題感受へとつなぐ太いパイプの役割を果たすものとして、表現方法の特徴から感受されるべき美的特性の大切さが認識された。たとえばフェルメール作『牛乳を注ぐ女』の鑑賞では、それが希薄であるためこの作品に対する第一印象と、最終的に感受された主題の内容との間に質的な変化は、ほとんど見られない。教師の努力にも拘わらず、上位の鑑賞能力を有する生徒にしか、主題は感受されないのである。たとえば前者では「何気ない朝の様子」「女性が神々しく見える」「マイペースな感じ」「写真のよう」、後者では「日常の中の美しさ」「女性が美しく見える瞬間」「平和な日常の大切さ」「絵の上手さ」などがあげられる。

そうした傾向を示すのは、両者の時間経過的な中間地点に表現方法の特徴から感得されるべき、多種多様な美的体験が介在しないからに他ならない。主題の十全な感受を生徒に達成させるべく、新たな美的特性か

ら第一印象にフィードバックする。かくて感じ方の共通項に着目させるとともに、それをもたらす表現方法の効果に気付かせるなどして、作者の表現意図や心情を探らせる術もないのである。そのため鑑賞能力が高いと評価される生徒は、第一印象の段階で無自覚ながら、全体的な美的特性としての主題らしきものを、いきなり把握してしまっている。

さらには第一印象の段階でありながら、美的特性として「質素さ」「クリーンな雰囲気」「朝ののんびりした感じ」「朝の穏やかな風景」が首尾良く感受されながらも、最終的な主題感受の場面で「生活の一コマ」「朝の光景」などの名詞句をあげて、単なる非美的特性の把握に後戻りしてしまっている。こうしたちぐはぐな場合も実に数多く見られた。

鑑賞能力に不足を来している生徒にあっては、フェルメール作品に関するワークシートの課題「表現方法の特徴から何が感じ取れるか」「主題として何が感じ取れるか」への回答として、どうしても形容詞句ではなく名詞句が並んでしまう。ここ「まとめ」で、本題材と『牛乳を注ぐ女』の実践と比較することで、鑑賞教育の題材としての適格性と有効性が明らかとされる。それは、表現方法の特徴から美的特性が数多く感受されうる、という条件である。

本題材の特質として、美的特性が互いに組み合わせられることで構造化され、154人中100名(64.9%)の生徒に、対比という美的秩序に関する美意識を目覚めさせる。その存在は単なる美的特性感受の場合よりも、主題の感性的把握へと確実に導く。こうしたユニークな教育効果が発揮されることが分かったので、この理論を今後の指導に生かすことができよう。

本題材の場合、美的特性の成り立ちについて言えるのは、美的特性が表現方法の特徴並びに主題をめぐって、ヘルメレンの考える全6類型がすべてここに出揃ったことである。美的なものの感受の幅広さにおいて、実に豊穡な事態がもたらされたのである。絵の主題としては感情特性や趣味特性、さらに反応特性が主に感受され、表現方法の特徴からは形態特性や自然特性が直観的に把握される傾向が認められた。自然特性や行為特性は双方で共通に感じ取られる事態が判明した。

※本稿は平成23～25年度科研基盤研究(C)「鑑賞教育指導案の批判的考察と授業モデル(方法論)の構築」

(課題番号23531151)による成果の一部である。

(平成24年9月28日受理)